

現職教育

1. 研究主題

すべての子がいきいきと活動する集団の中で認め合い高め合う子どもを育てる

～自発的・主体的に取り組む体育科の学習を通して～

2. 主題設定の理由

私たちは、一人一人の子どもを大切にすることから学習を始めようと考えた。これは、どの子ども授業の中で、「いきいきと活動」できるような学習を展開させたいとの願いからである。

「いきいきと活動する」とは、子どもが本来持ち得ている自発性を助長し、お互いの認め合いや高め合いを促進させ、温かい人間関係をも築くことだと考えた。

子ども同士の関わり合いを高めることは、お互いに助け合い励まし合う学習集団の形成を容易にすることにつながる。また一方では、学習意欲を喚起することにもつながる。それ故、一人一人の子どもが自らの力で自らの課題に向かって解決するような学習を促進することにもつながり、高め合う集団へと質的な発展が図れるのではないだろうか。私たちは、子どもが持つこのような力を大切にしながら、更に発展させたいと願う。

そこで、体育科では、一人一人の子どもが「自分の思いや願い」に基づいた課題（めあて）を持ち、学習に臨むことが研究主題に迫る大切な要素の一つであると考えた。

自分の思いや願いに基づいた「めあて」を持つこととは、子ども自らが課題達成に向けて計画を立て、それを実際の活動を通して試行錯誤することにつながったり、その成果を確かめながらより高次の課題へと質的な発展を遂げることににつながったりすると考えている。

このようなスタンスで研究を進めた結果、子どもが、自らの力で課題を発見し、その解決をも自らの力で成し遂げた時、周りの仲間から認められたり励まされたりして、一層運動することの喜びを味わうことが研究の成果として現れ始めてきた。このような成果は、生涯にわたって運動を享受していく基礎学習につながるものとなろう。

まだまだ研究途上ではあるが、私たちは、どの子どもいきいきと活動できる学習の場を提供することをめざし、研究を深めたいと考える。

3. 本年度の研究テーマ

子どもから見た運動の特性をいかした単元学習のあり方

私たちが求める自発的な学習は、子どもたちが運動の特性を求め、それに基づいた学習を進めることから始まる。また、クラスの子どもの立場から運動を見直すことにより、より子ども側に立った学習となり、自発性が引き出され、学習が深まっていくと考える。

子どもから見た運動の特性とは、学習する子どもにとって、その運動がどのような魅力を持っているのか、どのようなところが不安なのか、どのような楽しみ方ができるのか（学習の準備状況）ということであり、学習のねらい・道筋を導き出す大きな手がかりとなっていく。

子どもから見た特性をしっかりと捉えていくためには、運動の特性をまず捉え、その運動と子どもとの関係を子どもの目線に立って見ていく必要がある。子どもから見た運動の特性の捉え方によって、学習の様相は随分変わってしまう。

つまり、運動の持つ固有の「楽しさ」に向かって自然に生まれる自発的な学習の中で子どもたちが自立的に変容していくことを期待しているのである。

今一度、「子どもから見た運動の特性」という視点から検証し、「楽しい体育」に迫っていきたい。

4. 研究の経過と視点

私たちは、目の前の子どもの健やかな成長を願い、どの子ども楽しく学習に取り組んでほしい、どの子どもにも運動の楽しさを味わわせたいと、体育科を窓口として一人一人の子どもを大切に授業を展開してきている。また、平成7年度より、研究の視点は変わってはいるものの、「機能的特性を求める自発的な学

習」を大切に研究を進めている。

(1) 子どもの思いや願いをみつめる

運動の楽しみ方は、一人一人の子どもによって異なる。それゆえ、今一度原点に立ち戻って個々の子どもをみつめることに視点を当て単元学習を進める。

そこで、

I はじめの思いや願いをみつめる (単元学習開始前)

II なかの思いや願いをみつめる (単元学習途中)

III おわりの思いや願いをみつめる (単元学習終了後)

の三段階を指針とし、更に具体的にその観点を明らかにして取り組むこととする。

「はじめ」の段階では、学習前の子どもの内的な心情を探ることが重要と考え、三つの指導の観点を示し取り組む。

①学習する単元が好きなのか嫌いなのか概ね把握する。 《情意面》

②学習する単元についての知識や学習の進め方などについて概ね把握する。 《認知面》

③学習する単元に必要な技能のレベルについて概ね把握する。 《技能面》

このように具体的な観点を示すことによって、単元規模やその学習内容があらかじめ把握できることから、学習の過程に示した学習すべき道筋がより明らかになる。

次に、「なか」の段階では、具体的に教師が学習活動の中で、5つの観点を子どもの活動を観察する。

①運動すること自体に喜びや楽しさを感じる子どもを捉える。

②学習を深めていく途中で「問い」を見出す子どもを捉える。

③「あっそうか」「わかった」といった画期的な発見をする子どもを捉える。

④学習途中で発見した「問い」をもとに、その解決に向かってどのような方法で試行錯誤しているのかその活動の様子を捉える。

⑤子どもが共感している姿(自分だけでなく、友達とのつながりやかかわりを考えながら、楽しさを分かち合う姿)を捉える。

そして、これらの観点は具体的に学習カードや一口感想などを用いて明らかにする。その運用の仕方は、毎時間とってみたり、単元の序盤・中盤・終盤の三回に分けてとってみたりと様々であるが、子どもの思いや願いを知る手立てとしては有効であると考えられる。

最後に、「おわり」の段階では、単元終了時にその学習を振り返り、

①何を学んだのか。

②どのような方法で学んだのか。

③学習後にどのような力がついたのか。

を質問紙や体育作文などをもとに明らかにし、次の単元学習の参考にすることとした。

その結果、ある一つの単元で培われた力は、次単元にかかすことができ、履修単元の学習内容との関連からその規模やカリキュラムの内容、時数などの適正が図れ、総括的な事柄として単元終了後の子どもの思いや願いが具体的に把握できるようになる。

(2) 子どもの思いや願いをいかす

子どもの思いや願いをいかすためには、今までの指導の観点を今一度点検してみる必要がある。

○指導の順序を柔軟にする

指導者は、ある教材をある順序で指導しようとする。このとき、誰もが子どもの実態(学年の、学習集団としての、個々の子どもの)を捉えたことながらを基底的条件として指導しようとする。しかし、その順序が子どもの学習の流れと違ってくる場合がある。その時、指導者は自分の指導の順序に固執するのではなく、それに対応できるようにしたい。

柔軟な指導の順序は、学習が進むにつれて子どもは意欲的に取り組み、またその学習成果も向上することにつながるものと考えている。

○指導と評価の一体化を図ること

ある単元学習を始める前や単元学習をスタートさせた時には、その学習に対する子どもの診断的な評価をする必要がある。つまり、学習教材に対する子どもの思いや願いを知ることは、子どもの学習準備能力

(レディネス)を把握することにつながる。このことは、その学習指導計画において重要な要因の一つとして考えられる。

学校における教育活動は、意図的・計画的・組織的に行われることから、〔計画⇒実践（指導）⇒評価〕という一連の順序だった活動を繰り返し行うことが大切となり、このことから指導と評価の関連は重要である。

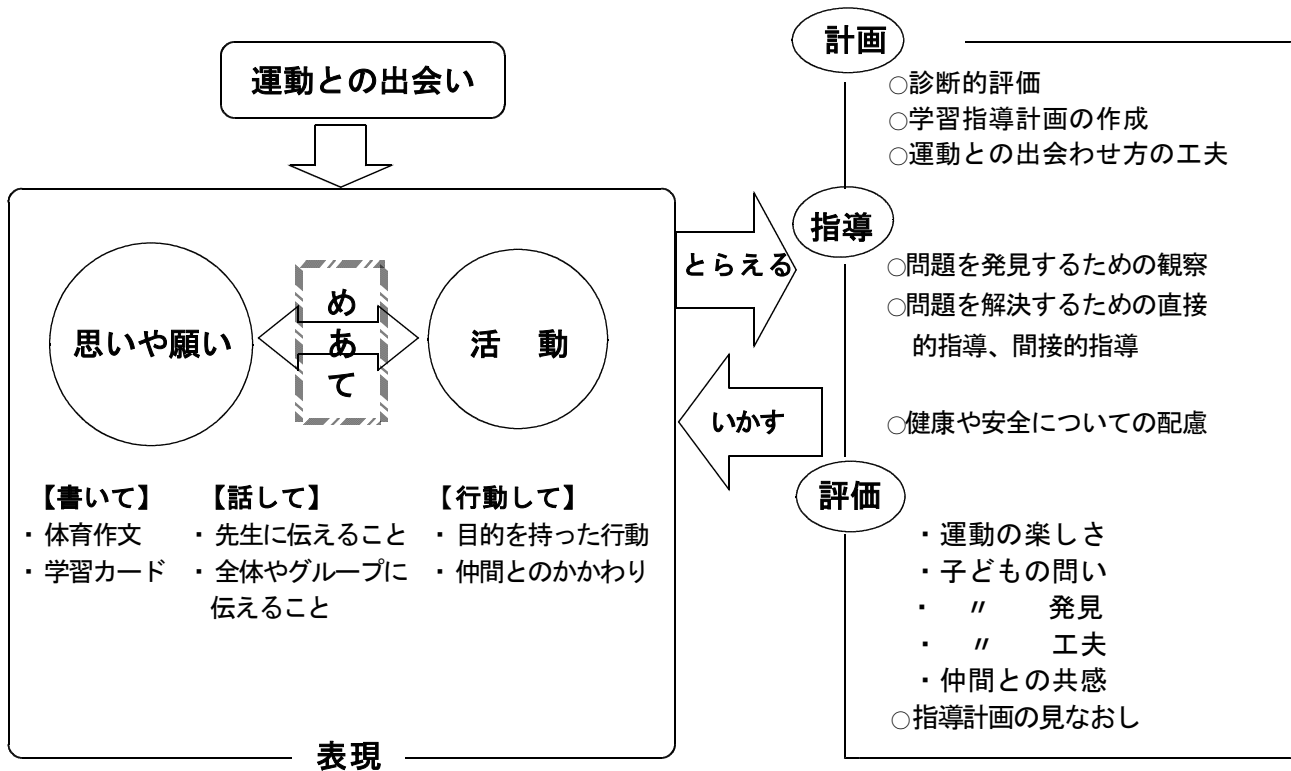
ここで言う「指導と評価の一体化」とは、指導した結果、その成果を見取るものとして評価を位置づけるものであり、その評価をフィードバックしつつ形成的な授業を目指すものである。それだけにここでの評価は、「子ども一人一人が基礎・基本の学力を身につけることができたかどうか」「生きる力をはぐくむことができたかどうか」という結果をみつめ、常に改善することを求められる。

○この子の思いや願いを表現させる。

子どもの思いや願いを「いかす」ためには、子どもたちが学習の過程で気づいたことや、学んだことを如何に次の学習にいかすかが問われることになる。そこで、子どもたちの思いや願いを表現させるとはどのようなことなのか、表現させるにはどのような方法があるのか、研究を深めたいと考えた。

表現の場、方法は子ども一人一人により違いがある。授業中に自分の考えや気持ちを友だちの前で発言する子どももいれば、話すことは苦手でも、体育作文などに書いてあらわすことが得意な子どももいる。また、練習方法の工夫や友だちとのかかわりの中で、自分の思いや願いを表現していくこともあろう。

私たちは、授業の中で、でき得る限り、子どもたちの思いや願いの表現の場を保証していきたいと考える。



○タイムリーな支援を行うこと

子どもの思いや願いに寄り添った学習展開を研究する過程でいくつかの課題も見えてきた。例えば、「めあて」の設定では、それが適切であるかどうかということが大切である。つまり、たとえ子どもたち自身が決めた「めあて」であってもその内容が高すぎたり、低すぎたりする場合は、子どもたちの意欲的な学習活動には結びつかない。また、学習を進めていく途中においても、子どもたちだけでは技能のポイントに気づきにくいことや、最初の「めあて」を達成したことから次の「めあて」を見い出せないことが原因となって活動が停滞する場合もある。私たちは、子どもたちの学習状況に応じて指導の順序を柔軟にして対応するだけでなく、タイムリーに資料を提供することや指導者から声かけ等を行うことが、子どもたちのさらなる活動の意欲を高める事になると考える。

私たちの研究は、子どもの思いや願いを大切に、評価と指導計画見直しを積み重ねていくこ

とが基本である。しかし、運動の楽しみ方も子どもの経験の範囲を超えて多様である。子どもたちは結果にこだわりがちではあるが、「逆上がりできたか」「何段のとび箱が跳び越せたか」「ゲームに勝ったか負けたか」といったこと以外にも様々な運動を楽しむ世界が広がっている。

子どもたちの思いや願いが、初発の範囲での実現をめざすことにとどまることなく、より発展的な方向に目を向けていけるような支援を研究していくことが大切であり、子どもたちが運動を楽しみ、学習を深めていくことにつながるであろう。

5. めざす子ども像

- 低学年 夢中になって運動を楽しむ子
- 中学年 仲間とかかわりながら運動を楽しむ子
- 高学年 自分なりのめあてを持ち、工夫して運動を楽しむ子

6. 近年における本校の研究の歩み

平成 6年度 研究の主体を体育科にしぼり、子どもが自発的に取り組む体育学習を進め、基本的な考え方について共通理解をはかり研究を深める。

---第4回近畿小学校体育研究会和歌山大会研究発表会---

平成 7年度 子どもの自発性を大切にしたい支援の在り方について研究を深める。

---第22回和歌山県学校体育研究大会和歌山大会研究発表会---

平成 8年度 子ども一人一人の追求の過程と単元を見通した指導の在り方について研究を深める。

平成 9年度 自ら意欲的に運動を楽しめるようになるための支援の在り方について研究を深める。

平成10年度 支援の観点を意欲・創意工夫・技能に整理し、それを学習過程に具現化する方法について研究を深める。

---第43回全国体育学習研究協議会和歌山大会研究発表会---

平成11年度 運動の楽しみ方と子どもとの関係の在り方について研究を深める。

平成12年度 子どもの思いや願いを大切に、運動の楽しさを味わうための学習過程の在り方について研究を深める。

平成13年度 子どもの思いや願いをみつめ、いかす単元学習のあり方

～「この子」の思いや願いをみつめるとは(第一年次)～

平成14年度 子どもの思いや願いをみつめ、いかす単元学習のあり方

～「この子」の思いや願いをいかすとは(第二年次)～

平成15年度 子どもの思いや願いをみつめ、いかす単元学習のあり方

～「この子」の思いや願いを表現させて(第一年次)～

平成16年度 子どもの思いや願いをみつめ、いかす単元学習のあり方

～「この子」の思いや願いを表現させて(第二年次)～

平成17年度 子どもの思いや願いを意欲につなげる支援のあり方(第一年次)

平成18年度 子どもの思いや願いを意欲につなげる支援のあり方(第二年次)

平成19年度 子どもからみた運動の特性をいかした単元学習のあり方(第一年次)

---第52回全国体育学習研究協議会和歌山大会研究発表会---

平成20年度 子どもからみた運動の特性をいかした単元学習のあり方(第二年次)

平成21年度 子どもからみた運動の特性をいかした単元学習のあり方(第三年次)

平成22年度 子どもからみた運動の特性をいかした単元学習のあり方(第四年次)

平成23年度 子どもからみた運動の特性をいかした単元学習のあり方(第五年次)

平成24年度 子どもからみた運動の特性をいかした単元学習のあり方(第六年次)

平成25年度 子どもからみた運動の特性をいかした単元学習のあり方(第七年次)

平成26年度 子どもからみた運動の特性をいかした単元学習のあり方(第八年次)

平成27年度 子どもからみた運動の特性をいかした単元学習のあり方(第九年次)

7. 体育学習年間計画

8. 現職教育年間計画

